



「ん、はっ……ああ……」



「ぺろっ、ぺろっ……」



「ちゅっ……ぴちやっ……」

「ああ……」

女達が身を寄せてきて、俺の全身に奉仕を始めた。

生温かい舌を這わせながら、柔らかな胸を擦り付けてくる。

最初は、美紗子、小鳥、藍那の3人。

涼子と真貴子は、今は離れたところから様子を窺っていた。



「荒浜さん……」

「んっ……」



「こういうの……どうですか？」

「ああ……いいぞ」

美紗子がチンポを握って上下に扱ってくる。

藍那は指を伸ばして、亀頭をくすぐるように刺激してくる。

どっちも気持ちいい。

いや、どっちもあるから気持ちいい。

普段にはない快感が、チンポからじわじわと伝わってきた。



「ん、ぺろっ……ぺろっ……」



「こっちも……気持ちいい？」

「ああ、そのまま……続けてくれ」

小鳥は俺の全身を舐めてくれた。

首筋、乳首、腰、腹。

たまに太ももだとかキンタマまで舐めながら、快感を送り込んでくれた。

これは……かなりいい感じだ。

今までに味わったことのない快感だ。

複数プレイってのは、こんなにも感じ方が違うもんなのか。



「おちんちん……もう、硬い……」



「先っぽも……真っ赤で……すごいです」

「いいぞ……そのまま続けて、くれ」



「ぺろっ……ぺろっ……荒浜さん、気持ち良さそう」



「小鳥、もっと舐めてあげるね」



「私も……ぺろっ……ちゅっ……」



「ぴちゃっ……くちゅっ……」

「あああ……」

女達の舌が這いずり回る。

唾液をまぶしながら、俺の体を濡らしてくる。

これは……かなり気持ちいい。

1対1でやってるときとは刺激の量が違う。

チンポを扱かれながら体のあちこちを舐められるなんて、初めての経験だった。



「んっ……んっ……んっ……」



「すごく、熱く……なってきましたよ」

「気持ちいい、からな」



「おちんぽの先も……すごく、ぬるぬるしてます」

「ああ……」



「すごいです。 どんどん溢れて……ああ……」

チンポがガチガチに勃起してくる。

勃起しすぎて痛いくらいだ。

表面には血管が浮き出っていて、美紗子達の視線はそれに集中していた。



「ん、れろっ……ちゅっ……」



「荒浜さん、おっぱい勃ってる」

「変なところ見てるんじゃない」



「だって……これ……ちゅっ……」

「んっ」



「気持ち、良さそう……」

小鳥が舌を動かしながら、俺の反応を観察するようにつめてくる。

こういうプレイは初めてだから、なんだかんだで楽しんでるらしい。

腹の辺りを撫でる手の動きも、どこか普段とは違う色っぽさがあった。



「震えて……おちんちん……ビクって……」



「このまましてたら……射精、しちゃいますか？」

「ああ……そう、だな」



「イきたい、ですか？」

「イきたいな。イかせてくれるか？」



「はい」



「わかりました」

「うっ……」

チンポの扱かれ方が激しくなっていく。

美紗子の手がリズミカルに表面を擦ってくる。

カリの部分に指が引っ掛かって、ものすごく気持ち良かった。





「イきたかったら……」



「イってもいいのよ？」



「アタシ達の体に……」



「精液をかけていいのよ？」

「ん、んんっ……く、うっ……！」

涼子と真貴子が、うっとりとした表情で声をかけてくる。

優しくて、それでいて誘うような声。

俺がどんなふうを感じてるか、じっと観察するような目で見つめてきていた。



「ん、ふっ、はあっ……あ、ふあっ、ああああっ……」



「なんだか、私まで……ん、うっ、気持ち良く……」



「硬くて、太い……ああ、おちんぼ……」



「精液、いっぱい出して……んっ、私を……白く……」



「出して……この、おちんぼから……早く……」



「私を、白く……精液、まみれに……」

「んっ……ん、うっ……！」

だんだん射精しそうになってきた。

チンポから心地良さが染み込んできて、手足の指先まで伝わっていった。

この柔らかさがたまらない。

チンポが揉みくちにされて、痛いくらいに勃起してしまっている。

尿道口からはガマン汁がトロトロと流れて、涼子と真貴子の胸を汚していった。



「んっ……ふっ……うっ……！」



「くっふ……んんっ……あ、んっ………！」



「そろそろ、イきたいって、顔してるわね」

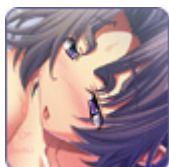


「貴方のそんな顔、んんっ、初めて見た気がするわ」

「ああ……気持ちいい……」



「イっていいのよ」



「それとも、我慢したければしてもいいって言ったほうがいいかしら？」



「ふふっ、どこまで我慢できるかしらね？」

「んんっ………！」

我慢なんかできるはずもない。

こんなのイかないほうがおかしい。

射精感はどんどん高まってきて、そろそろ自分の中に抑えておくのも限界だった。

「イ……ク……」



「イクの？ もうイクのね？」

「う、うっ……」





「あと何分……いいえ、何秒耐えていただけるかしら？」

「んんっ……だめだ……ッ！」

チンポが力強く擦られる。

力強いのに、柔らかく包まれる。

この感触はすご過ぎる。

チンポが溶けないほうがおかしいとさえ感じてしまう。

「き、気持ち、いい……」



「うっとりとした顔しちゃって」



「ちょっと似合わないけど……でも、可愛いわね」

「イ、ク……マジで、イク……」



「いいわよ。いつでも……」



「私達に……全部かけて……」

「ん、んんっ……！」

チンポが揉まれる。

チンポが擦られる。

チンポが破裂しそうなまでに膨らんで、俺は……自分からも腰を振っていた。

「んんっ……く、イクッ……イクぞ……ッ！」



「ええ……イって……イって……」



「私達の、おっぱいで……イって……」

「くう……ッ！」

快感の波が押し寄せてくる。

チンポが揉みくちやにされて、快樂の海に沈んでいく。

気持ちいい。

射精したい。

それ以外の思考をする余裕はなくて、俺はただ乱暴に腰をピストンさせ続けた。

柔らかなおっぱいに、自分からチンポを擦りつけ続けた。

「く、あっ……イクッ……イク、ぞ……ッ！」



「んっ、んっ、んんっ……！」



「ん、ふあっ……あ、ん、んんんっ！」



「ああ、くるのね……白い、熱い……あれが……」



「おちんぽから、精液が……白い精液が……」

ここで終わるわけにはいかない。

それが許される空気じゃないし、俺自身もそんなのは嫌だ。

相手が1人でも5人でも、最後にやるべきことは決まっていた。



「そら、いくぞっ！」



「ん、ああああッ！！！」

女達を5人横一列に並べて、俺はすぐさまチンポを挿入した。

最初が一番近くにいた藍那。

マンコの中はぐっしりと濡れていて、チンポは簡単に奥まで入ってしまった。



「あ、んんっ……これ、ふ、あっ……荒浜さんの、おちんぽ……ッ！」

「マンコの中がグショグショだな」



「あ、ふあっ……お、奥に……響く、ん、んんうっ！！」

加減するつもりはなかった。

正確には、加減なんてできる余裕がなかった。

俺の中で欲望はすでに爆ぜてしまっていて、腰を動かさずにはいけない。

「んっ……んんっ……！」



「あ、んあっ！？ 激し、いっ、ひいんっ……ん、ううっ、く、ふっ……！」



「んんんっ、んんんんんっ、んんんんんんんんんんっ！！！」

「どうだ？ 感じてるか？ マンコが気持ちいいか？」



「は、いっ！ 感じて、ますっ！ んひいっ、おまんこっ、あ、ああっ、おまんこが、気持ちいいですっ！」



「おまんこが、あ、あっ、気持ち、良すぎて…… くひいっ、濡れて……んああっ、濡れ濡れまんこに、なっちゃううっ！！」



「はああっ！ 気持ち、いいっ！ この、硬いおちんぽが、あ、勃起ちんぽがいいっ！ いいのおっ！！」



「勃起ちんぽでっ、もっと……ふああっ、もっとちんぽ突いてっ！ もっと、ん、ああっ、私の濡れ濡れまんこお、ん、ああっ、グチャグチャにしてええっ！！」



「す、ごおい……」



射精はした。

だが、俺のチンポは藍那の中で硬く膨らんだままになっている。

当然だよな。

何しろ女達はまだ4人もいるんだから。

ここで萎えるわけにはいかなかった。

「次は……涼子だっ！」



「あああんっ！」

涼子のマンコにチンポを突っ込んだ。

やっぱりこっちも濡れていて、挿入は驚くほど簡単だった。

「マンコ、グチョグチョじゃないか」



「ふ、ふふっ……そうよ」





「んっ、く……早く、入れてほしいって…… ん、あぁっ、待ってたんだから……」

「そして、出してほしい、だろ？」



「ええ、そう……あ、ふっ、出して……アタシにも……」



「あなたの精液を……んっ、ひ、あっ、おちんぼ、からの…… ちんぼ汁を……出して……ッ！」

「んんっ！」

腰を振ってピストンを開始する。

マンコの入り口から子宮まで、まるで肉穴を拡げるように責め立てた。



「ひぁんっ！ あ、んんっ…… くる、う、あっ……きてる……ん、ひいんっ……！！」



「大きな、あ……極太の、んあっ、ぶ、ぶっといちんぽが…… あ、あぁっ、子宮まで、届いて……ッ！！」

「気持ち、いいか？ これがいいか？」



「あ、あぁっ、いいっ……おまんこ、良くて……ん、濡れる…… く、ひぁっ、濡れ濡れの、グチュグチュまんこになっちゃうっ！！」

藍那に対抗心でも燃やしているのか、涼子も卑猥な言葉を吐いてくる。

マンコの中は別の生き物みたいにならなっていて、チンポが揉むように刺激された。



「あ、んあっ……そこ、あ、もっと……突いてっ…… ちんぽで、突いてっ……突いてっ……！」

ああ、気持ちいい。

チンポからドクドクと精液が流れ出てくるのがわかる。

この快感を、もっと味わいたい。

他の女のマンコでも味わいたい。

だから、次は——



「ふあああああツツ！！？」

小鳥のマンコに突っ込んだ。

俺のチンポは精液と愛液で濡れていたが、小鳥の中はそれ以上に濡れ濡れだった。



「あ、ひっ……入って、きて…… ん、んんっ、荒浜さんの、おちんちん……っ！」

「待たせたな」



「あ、んっ……あああああッツ！！！」

腰を前後に動かし始めると、小鳥が裏返った声で鳴いた。

チンポにグチュッと愛液がまとわりついてきて、動くたびに反対側に引っ張られるような感じがした。

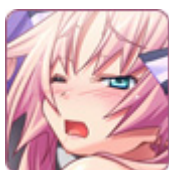


「あ、ひあつ……ん、あ、あつ……んああつ！」

「んっく……！」



「すご、ひっ……奥、う、子宮……んんっ、ずんって、当たる…… あ、ああつ、おちんちん、んんっ……おちんぽお、当たる……ッ！」



「な、中に、ひんっ……おちんぽ、当たる…… んああつ、小鳥の、おまんこ、の……濡れ濡れまんこにい…… おちんぽ当たってるよお……ッ！！」

「くうっ……！」

藍那と涼子の影響を受けたのか、小鳥も卑猥な言葉を口にし始めた。

記憶してる限りでは、こんなセリフを吐くのは初めてのことだ。

マンコは痛いくらいにチンポを締め付けてきて、それが快感となって俺に伝わってきた。



「はあんっ、お、おちんぽ、いいっ…… すこく、ううんっ……気持ちいい……ッ！」

「俺も……いいぞ……」



「気持ち、いい？ あふあつ、んっ、小鳥の、濡れ濡れまんこ…… ん、ああつ、そんなに、いいの？」

「ああ、いいぞ。 小鳥の濡れ濡れマンコは……最高だ」



「次は、真貴子の番だっ！」



「んくうううううう……ッ！！！」

小鳥からチンポを引き抜いて、すぐに真貴子のマンコに挿入した。

グチュッと湿り気のある感触が伝わってきて、結合部からは愛液の塊がこぼれ落ちた。



「あ、んふっ、あぁっ……おちんぼ、あ、あぁっ、入って、きた……ッ！」



「太くて、熱い……んくうっ、勃起ちんぽが、あふぁっ、奥に……んんんっ……！！」

「マンコの中、グッチャグチャじゃないか」



「だ、だって……くひあぁっ！」

「パイズリで感じたか？ それとも、待ってる間に感じまくったか？」



「あ、ああっ、どっちも……ん、ひあっ、どっちも、おまんこが、濡れて…… 濡れ濡れの、グチャグチャの、グチュグチュまんこに……」



「んひいっ！？ ひ、あ、んああんっ！ くああうううっ！！！」

真貴子の悲鳴が上がる。

俺のチンポで突かれるたびに、体をねじって喘ぎ続ける。

マンコはギチギチと締め付けてきて、チンポが揉まれるように刺激される。

射精感の高まりは、一向に収まる気配がなかった。

「くっ……ふっ……ううっ……！」



「ああんっ、そこっ、濡れ濡れまんこの、そこっ…… あ、ああっ、あああっ……！」



「もっと、突いて……んあっ、激しく、して…… ぶっといちんぽで……ひああっ、グチャグチャにして……ッ！！」

「こうか？ こういう感じで、満足か？」



「ああっ、そうっ……！ その感じ……ん、ひあっ…… あああっ、まんこがっ……まんこが気持ちいいいいッッ！！！」



「あなたの、ひいんっ……勃起した、極太ちんぽで、掻き回されるの…… ん、んんうっ、たまらないいいッッ！！」

真貴子の体がガクガクと震える。

自分の体を支えるのも、限界ギリギリの状態らしい。

気を抜けば前のめりに倒れてしまいそうだったが、それでもマンコは貪欲にチンポをしゃぶり続けていた。





「んっ……ふあああっ……………！？」

美紗子のマンコにチンポをねじ込んだ。

まだ、精液が少し染み出してたけど、そんなものはお構いなしだ。

ここまできたら、とにかく美紗子のマンコでもイかないと気が済まなかった。



「あ、ん、ああっ……ひあっ、あ、ふあああっ！！」



「荒浜さんの、おちんちんが……ん、んうっ、奥まで……！」

「くうっ……すごい締め付けだが……すごい濡れ方だな」

美紗子のマンコは、予想していた以上にグチャグチャだった。

肉穴の中に大量の愛液が溜まっていて、チンポを突っ込んだだけでそれが外にこぼれてきた。

ああ、チンポが揉みしだかれてるみたいな感じがする。

いや、それとも吸い付かれてると言ったほうが正しいか。

それとも、手コキみたいに扱かれてるとも……。

あまりにも射精をし過ぎて、そろそろ正しい刺激がわからなくなってきたらしい。

だが、それでも気持ちいいということに変わりはなかった。



「ん、んんっ……ひ、ふあっ……あああっ……！」

美紗子が心地良さそうな声で喘ぐ。

自分から積極的に尻を振ってくる。

チンポは一定のリズムで締め付けられて、思わず声を漏らしてしまいそうになるほどだった。



「あ、んあっ……奥に、当たって…… く、ひいつ、そこ……し、子宮……ッ！」

「ここか？ ここが当たるのがいいのか？」

「ここに……俺のチンポがぶつかるのがいいのか？」



「は、はいっ……いいです、んんっ、そこに……そこに、おちんちんが……」



「あふあっ、おちん、ぽが…… おちんぽがっ……ぶつかるのが、気持ちいいいッ！！」



「んんっ、おまんこの、中、あ……ふあっ、おちんぽが、動いて…… んっくうっ、おちんぽが、あ……動いてるっ！」

「くっ……んっ……！」

美紗子の腰を掴んでピストンを続ける。